

# 産官学連携のキャリア教育の取り組み

前カイロ日本人学校 教諭

大阪府大阪市立平野北中学校 教諭 渡辺 一弘

キーワード：キャリア教育，産官学連携，日本人会への発信，進路指導

## 1. エジプトという国

エジプトの総面積は日本の約2.7倍の広さで、その約95%は砂漠に覆われている。国土の中央を世界最長のナイル川が南北に流れており、主要都市の多くがその流域に位置している。

気候は地中海方面を除き、大部分が砂漠気候に属しており、年間通してほとんど雨が降らない。ちなみにカイロ市の年間降水量は、大阪の梅雨における、一日の降水量とほぼ同じである。3月～5月にはハムシーンと呼ばれる砂嵐が吹き荒れる日もあり、ハムシーンが吹く日は町中が黄色くなり、窓を閉め切っているにもかかわらず、どこからか家の中まで砂が入ってくる。また夏は日中頻繁に40℃を超え、さながらドライヤーの熱風を全身に浴びている感じである。

エジプトの総人口は約7500万人といわれ、その9割以上がアラブ系とされている。また人口の9割がイスラム教徒であり、日常は、そのイスラム教に根付いた生活をしている。

このような風土にあるカイロ日本人学校は、カイロ市の南西の端に位置し、有名なギザの三大ピラミッドのすぐ近くにあり、屋上に上がるとピラミッドがよく見え、子ども達は毎日ピラミッドを見ながら通学し、ピラミッドのもとで学習している。また学校の周囲はカイロ市内の喧騒とは異なり、ロバや牛などが農作業をし、時にはラクダも行き交うのどかな風景が見られる。児童生徒数は小学部24人、中学部10人（平成22年3月現在）の全校生徒34人で、多いクラスでも5～6名の少人数校であり、小1～中3までが学年を超えて非常に仲良く過ごしている。

## 2. キャリア教育の必要性和協力者との出会い

カイロ日本人学校では、少人数校の良さでもあるように、児童生徒が家庭的な雰囲気の中で学習できる環境があった。反面、学校及び家庭以外に社会との関わりが少なく、互いに切磋琢磨するような雰囲気はあまり見られなかった。また日本と比べて情報が極端に限られ、自分の未来を意識し、主体的・意欲的に夢や将来を考える機会があまりにもないと、赴任当初から感じていた。このことから、私は何とかカイロ日本人学校でキャリア教育を実践できないかを考えた。平成19年度も終わりに近づいた頃の職員会議等で、進路指導やキャリア教育の重要性を何度も発信していたところ、平成20年度のPTA会長のH氏が私の考えに大いに賛同してくださった。

H氏は経済産業省からの出向で在エジプト日本国大使館に勤務しており、エジプトの産業振興に関わっていた。また経済産業省が推し進めるキャリア教育事業にも前向きに考えておられ、私が推し進めたいと考えていたキャリア教育に全面的に協力頂けることになった。

## 3. カイロ日本商工会でのプレゼンテーション

果たして、日本から1万km離れたカイロで、キャリア教育は実現できるだろうか。教材や社会資源もなく、在留邦人も1000人程のカイロで実現できるか正直不安であった。児童生徒が目標や夢を持ち、目標や夢の達成のために主体的に考えて変化の激しい社会で生きる力を培わしたい。何とかそのようなことを子ども達のために実現したいと考えていた。

キャリア教育には幾多の指導法があるが、実際に社会で活躍している方から仕事の魅力や夢について聴く機会を

もつことは重要である。そのためにカイロの人的資源を活用したいと思い、当地の商工会にご協力頂けないかと考えた。そこでH氏に相談したところ、偶然にもH氏はカイロ日本商工会のメンバーであり、カイロ商工会月例会に出席できるように手配して頂いた。そして平成20年5月に、カイロ商工会月例会に出席し、加盟各社・機関に対し、趣旨説明と協力のプレゼンテーションをしたところ、多くの皆様から賛同を頂いた。月例会終了後に行われた懇親会にも参加し、各社所長にも個別にキャリア教育の説明を行い理解を求めたところ、複数の方から具体的な提案を頂いた。この時に、在外教育施設で行うキャリア教育への手応えを厚く感じた。

#### 4. 教職員の協力

外部の協力を得たとはいえ、実際に教育活動を行うのは学校である。校長をはじめ教職員の協力なしでは十分な教育活動は行えない。そのため、後日の職員会議では、「キャリア教育とは何か」から説明を行い、案件を作成し丁寧に説明した。幸いにも各先生方はキャリア教育に好意的で、何度も何度も職員会議で説明や報告を行っていくうちに、先生方もキャリア教育の強力なサポーターになっていったのである。

そこで、学校全体として取り組むキャリア教育の全体計画案を作成し、職員会議で承認も得ることができ、小学生から中学生までの発達段階に応じて、年間を通じて系統的なキャリア教育を、学校総体で進めることになったのである。その後取り組みを実践していくうちに、秋口には、外部にも本校のキャリア教育が浸透するようになっており、数件の問い合わせが来るようになった。以下では実施したキャリア教育の取り組みを紹介する。



【恒例行事のピラミッド持久走大会にて】

#### 5. キャリア教育の実践

##### (1) ビジネスマンによる講演（平成20年7月）

7月、中学生及び全校保護者を対象に講演会が行われた。先の商工会でのプレゼンテーションで、幸いにも多くの方から前向きな返事を頂いた。人選を熟慮した結果、住友商事所長（日本人会会長）、三井住友銀行所長、きんでん所長にお願いすることになった。講演は保護者も多数参加する中で行われ、大盛況のうちに終わった。この様子は学校広報誌「ひろば」で紹介し、他の保護者にも周知された。またカイロ日本人会機関紙「パピルス」にもH氏と共同で投稿文を掲載し、広く日本人会コミュニティーにも周知された。

##### (2) 医師及び看護師による講演（平成20年11月）

H氏の紹介で、大使館医務官と大使館看護師が講演をして頂けることになった。小学生に対して健康安全に関する講話が行われた。また中学生に対しては、仕事の内容と、現在の仕事にたどりつくまでの悩みや葛藤等、キャリア教育を意識させる講演を行った。特に中学生はうなずきながら話を食い入るように追っていたことが印象に残る。前回同様に、学校広報誌「ひろば」で紹介した。

##### (3) 芸術家による講演（平成20年12月）

「夢を実現した行動力から学ぶ」ことを主眼においた芸術家による講演が行われた。講師は、カイロで夢を実現したプロの日本人ベリーダンサーである。ダンスの披露と講演に続いて、表現運動教育の一環として、講習会も行われた。海外の伝統芸能に関わる方の支援を得ることで、キャリア教育と国際理解教育の融合という、日本国内では為し得ない新しい形の教育が実現できたのである。

#### (4) 宇宙飛行士による講演（平成20年12月）

7月に実施された講演会で、一人の生徒が「宇宙飛行士になりたい」と、自らの夢を熱く語った。平成20年は日本・エジプト科学技術年であり、その閉会式に参加するために、12月に日本人初のスペースシャトル飛行士の毛利衛氏がカイロを訪問する計画があったのである。そのため、私はH氏に毛利氏を日本人学校で講演して頂けないかどうか依頼した。H氏と在エジプト日本国大使の尽力で、当初予定していなかった日本人学校での講演を実現することができた。キャリア教育の視点からも事前学習に取り組むことができ、その生徒は今まで以上に強い夢を抱くようになり、現在、宇宙飛行士を夢見て、理科学系の高等学校に進学している。



【毛利宇宙飛行士と記念写真】

#### (5) 大使館訪問（平成21年1月）

当時の在エジプト日本国大使は、夢の大切さをよく語る人物であった。そのため、外交官である大使の講話は子ども達にとって非常に有益であると考え、講演を依頼した。大使自身も本校のキャリア教育の主旨に賛同してくださり、結果、在エジプト日本国大使館にて大使の講演会が実現できた。在エジプト大使自身も帰国子女であり、非常に子どもたちと境遇に近い。そのことも含め、仕事の大切さ、夢を持つことの大切さを語って頂いた。講演後は大使館の各班（政務班、経済班、領事班、広報文化班）からの業務説明も合わせて行われ、子ども達は普段接することのない大使館の仕事に触れることができた。その後大使館内の見学も行うことができ、とりわけ日本の職場訪問のような形が実現できた。また大使の計らいで大使室内にも案内され、大使から子ども達の一人ひとりに語りかける姿が印象的であった。

#### (6) ドリーミング・ワールド（平成21年2月）

「ドリーミング・ワールド」とは、自分の“好き”を糸口として、将来の夢を考えて、自分の夢や目標を画用紙の上にビジュアル化したものである。夢を画用紙に描くことは、様々な学校で行われていることであるが、本校での新しい取り組みの特徴は、夢の実現過程を表現する際に、「自分以外の人を幸せにしなが、自分の夢を叶える」という視点を加えたことである。というのは、児童生徒が持つ夢の多くは、人の支えが必要であり、家族や周囲の人が共感し、協力する人が現れば、ぐっとその夢に近づくからである。世界を舞台に生活している、相手の夢と自分の夢を考えた、子どもたちの夢が詰まった作品を「ドリーミング・ワールド」と名付け、今年度のキャリア教育の集大成とした。

### 6. 在外教育施設でこそ実現できるキャリア教育

在外教育施設において、体系的なキャリア教育への取り組みの前例がほとんどない中、無我夢中で走った3年間であった。海外で学ぶ良さがある一方で、海外にいるから生じるハンデも数多い。もともとは、弱みを補うという動機で進められたキャリア教育だが、3年間を終えてみると、実は、海外の日本人学校でこそ、キャリア教育に取り組むやすい条件がそろっていることがわかった。弱みを強みに変えられる可能性は十分あるのだ。以下は在外教育施設でキャリア教育を実施する際の、私なりの留意点である。

#### (1) キャリア教育の応援団

キャリア教育は、先生方や保護者の協力なしでは実現できないし、学校外の協力者なしではなしえない。教職員

で教科指導との連携を含め、共通の理解を醸成し、保護者への理解を得ていく。その時、教職員と保護者がチームを組むことで、ネットワークが広がりやすい。講演等の後は随時、学校の会報や日本人会誌で報告し、良き理解者を1人でも増やすことで、ネットワークが広がっていく。

## (2) キャリア教育の講師

講演会等の講師については、日本人学校の多くは、日本人会や大使館等を母体に行っていることから、会合に出席したり、個別に説明したりすることで、実は協力してくれる方が身近にいたと気づくこともある。今回のように異業種が集まる日本商工会の月例会で、説明を行うことで支援が得られる場合もある。在外教育施設の所在地によって、講師が見つかりやすい分野と、見つかりにくい分野がある。当地では、例えば、子どもたちの代表的な夢の1つである科学者は見つけにくく、キャリア教育の講師派遣スキームでもない限り、日本から講師を呼ぶことは、財政的にも不可能である。しかし今回、毛利宇宙飛行士の講演のように、学校単独では講師の招聘は不可能であっても、大使館の協力で、出張計画がある方に日本人学校へと足を伸ばして頂くことをお願いすることで、講演が実現したものもある。

## (3) 各教科への学習意欲の高まり

海外で学ぶ子どもたちは日本と比べ、教材・情報などあらゆるものが不足している。極論、夢を考える環境も不足している。日本と違い職業などを目の当たりにできない海外では、特に進路が迫られてくる中学生が、職業観や勤労観が欠如してくるだけでなく、自身の進路が漠然としたままでは、学習までも身に入りにくいこともある。しかしキャリア教育を実施することで、自然と夢を持ち、職業観・勤労観も身につく、各教科に関する生徒の自発的な学習意欲も高まる結果となった。

## 7. 最後に

平成20年度の実績から、キャリア教育は平成21年度より学校経営の柱の1つに組み込まれた。そのため、赴任当初にはなかった「進路指導部」も創設され、進路指導やキャリア教育に携わる教員も複数で当たることになり、より密度の濃いキャリア教育や進路指導が実現できる体制ができた。またカイロ日本人学校でのキャリア教育は、当地日本人コミュニティでもより周知され、「カイロ日本人学校といえばキャリア教育」と言われるまでになった。ただ、在外教育施設における先例が少ない中、カイロ日本人学校のキャリア教育は始まったばかりで、試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいる。

幸いなことに、キャリア教育を実践したことで、当初の私の理想であった、子ども達が自信を持って「夢」を語り合う姿がカイロ日本人学校の校庭ではよく見られるようになった。また帰任後の現在も、カイロ日本人学校ではキャリア教育を重要な教育活動と位置づけて活動を行っているようである。今後も自らの夢や希望を分析し、目標実現までの道筋を考えながら学習課題を発見し、そして、そのために基礎学力や生活習慣をしっかりと身につけることができるよう、小・中学生の発達段階に応じて、様々な角度からキャリア教育を推し進めていくことを期待する。